会　　　議　　　録

１　会議の名称　　第２回岡谷市まち・ひと・しごと創生有識者会議

２　会議日時　　　平成27年７月８日（水）午後１時00分～３時00分

３　開催場所　　　岡谷市役所　９階大会議室

４　出席した者の氏名

（１）委員　　　小口泰史委員、笠原新太郎委員、中村文明委員、中村麻紀委員、

塩原氏（浅井秋彦委員代理）、大畠一洋委員、花岡欣二委員、中山昇委員、

小池良彦委員、小山智委員、小野正行委員、薩摩建委員、

横内敏子委員、久保寛男委員、太田博久委員、小林伊奈子委員、

今井竜五委員、中田富雄委員、宮澤昇委員

（２）執行機関（事務局）山岸徹、岡本典幸、小松秀尊、相河美咲、内尾祟人

田村賢二、廣瀬智子、仲田健二、三澤達也、両角秀孝、名取浩

（３）その他　　(株)サーベイリサーチセンター　静岡事務所　田原歩

（人口ビジョン・総合戦略策定に関する調査・分析業務　委託業者）

５　議題

（１）国・県等の関係機関の動向

（２）地方創生に関する意見交換

（３）その他

６　会議資料の名称

資料１　「長野県人口定着・確かな暮らし実現総合戦略」の施策構築に向けた現状と課題

資料２　労働基準行政を取り巻く情勢

資料３　業務月報

資料４　岡谷市まち・ひと・しごと創生有識者会議スケジュール（案）

資料５　長時間労働の削減に向けて

７　発言の内容

|  |  |
| --- | --- |
| 事務局  会長  事務局  事務局  事務局  会長  塩原氏  委員  塩原氏  会長  委員  会長  委員  委員  委員  委員  委員  委員  委員  委員  委員  委員  会長  委員  委員  委員  委員  委員  委員  委員  委員  委員  委員  委員  会長  事務局  会長  事務局 | （１　開会）  定刻前ではございますが、皆さんお揃いでございますので、始めさせていただきます。本日は大変お忙しい中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。ただいまから、第２回岡谷市まち・ひと・しごと創生有識者会議を開催いたします。会議の前に、市民憲章の唱和を行いますので、恐れ入りますが、ご起立をお願いいたします。次第の裏に憲章文がございます。職員が前文を読み上げますので、わたしたちはからご唱和をお願いいたします。  （全員で市民憲章唱和）  ありがとうございました。ご着席ください。続きまして、会長よりごあいさつをお願いいたします。  （２　会長あいさつ）  皆さんこんにちは。皆さんにおかれましては、本日は大変お忙しいところをご出席いただきまして、まことにありがとうございます。先週皆様にご出席いただきました第１回岡谷市まち・ひと・しごと創生有識者会議におきましては、国・県・市の取り組み状況ですとか、それから人口動態などについてお知らせとご報告をさせていただいたわけでございます。本日の第２回目の有識者会議でございますけれども、県の取り組み、それから諏訪地域の労働環境、それから雇用状況、こういったもののお話をお聞かせいただきたいというふうに思っているところでございます。その後、この地域を支えます産業の振興、そして若い世代の声を確保、また結婚・妊娠・出産・子育て・教育まで切れ目のない支援、そして新しい人並びに皆さんがどのようにお考えか、それをお聞かせいただきたいと思っています。是非それぞれの立場、もとより、このまちに暮らす市民の１人として、また、市外にお住まいの他の視点からこのまちを創生するための幅広いご意見をいただきたいというふうに思っておりますのでよろしくお願いいたします。  ありがとうございました。本日はご都合によりまして、早出委員さん、武田委員さん、伊藤委員さんがご欠席となっております。会議事項に入る前に資料の確認をお願いいたします。  それでは、確認のほうをお願いします。まず次第がございます。その次に左上に資料１というふうに書いた「長野県人口定着・確かな暮らし実現総合戦略」の施策構築に向けた現状と課題というホチキス止めのものが１部、その後、右肩に資料２ということでございますけれど、労働基準行政を取り巻く情勢という資料、それと、カラーの長時間労働の削減に向けてというパンフレット、続いて右上に資料３と記載がございます業務月報というもの、それと最後に資料４ということで日程表をお配りしております。それと最後に岡谷市工業活性計画という冊子がございますので、よろしくお願いします。何か足りないものがあるかたがいらっしゃいましたらおもちいたしますのでよろしくお願いいたします。  それでは会議事項に入ります。今井会長、議事進行をお願いいたします。  （３　会議事項）  それでは会議事項に入らせていただきます。会議事項１の国・県等の関係機関の動向を議題とさせていただきます。初めに諏訪地方事務所地域政策課長、塩原様より長野県の状況についてお話をいただけるということですのでよろしくお願いいたします。  （１）国・県等の関係機関の動向【資料１より説明】  ・子育てや人材定着等について現状と課題を説明  【質問】  説明いただいたなかで理解していない言葉があったものですから教えていただきたいのですが、７ページの目指す姿の下のところの半農半や二地域居住、これをすみませんが、もう少し説明いただけますでしょうか。  【回答】  すみません。半農半Ｘというのは、最近のライフスタイルとして取り上げられておりますけれど、いわゆる、半分は農業をして、半分は好きなことをやるということですね。あるいは半分は営業活動をやったりですとか、そういうようなライフスタイルをさします。それから二地域居住というのは、例えば、仕事は首都圏でやりながら、週末だけ例えば諏訪地域に帰ってきて、こちらで農業をやるとかですね、そういう二地域を居住するというかたちをしております。  ありがとうございました。他にございますか。また色々データを見てもらったりして、また課長さんのほうに質問させていただければと、そのように思いますけれど、よろしくお願いいたします。とりあえず、次に進めさせていただきますのでお願いします。次に岡谷の労働基準監督署の大畠様よりお話をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。  （１）国・県等の関係機関の動向【資料２より説明】  ・労働環境や労働時間について現状を説明  私どもこういった労働トラブルを処理している機関として申し上げたいことは、やはり今後、特に労働者に優しい会社といいますか、市民から慕われる会社を持つこと、育てることが大事ではないかと思っています。周りからもあの会社なら大丈夫だとか、あの会社は社員を大事にするとか、好評価を持つような会社をたくさん持つことが大事だと思いますし、どうしても労働相談が多い会社はトラブルも多いですから、労使間の信頼関係が薄れてくる。薄れてくれば労働者も機会をとらえて別の会社に移ろうかなとか。そうなってしまうと思っています。また長時間労働、休日労働の多い会社というのは成果主義だったり、ノルマを課したりしていますので、有給休暇を取れなかったり、場合によっては週休５日制もかたちだけになってしまっている。そういう会社だと労働者も離れていってしまうのではないかと思っています。労働者にとって働きやすい会社をつくっていくことが大事ではないかと思っています。私は岡谷にきて３か月４か月ほど経ちますが、岡谷市はものづくりをキャッチフレーズとしています。ものづくりを今後発展させていくためにはいいアイディアを生み出す職場環境といいますか、そのためには労使間の信頼関係が基本だと思いますし、安定した雇用環境の下で働きやすい労働環境をつくっていく、そういった会社がたくさんあることが望ましいのではないかと思っています。労働者が勤めていて生きがいを感じ、この会社に尽くそうと思わなければいいアイディアは生まれてこないと思います。積極的にやろうという前向きな意識をもつ、そういう労働者を多くもつ、そういう会社をたくさん育てていくことが大切だと思います。そういう会社だと評判が良くなって、市民から愛される会社になり、退職労働者も減りますし、それによって労働者がその会社に定着するようになるとその地域に定住するようになって、家族の定住率も上がるのではないかと思います。その結果、転出者も減って、また逆にそのいい会社に勤めようと他の地域から転入者がくる、そういうことで人口減少に歯止めがかかると思います。  ありがとうございました。ただいまの説明に対しまして何かご質問、それからご意見等はございますでしょうか。とりあえずないようでございますので次に進めさせていただきますが、次に諏訪公職業安定所の花岡委員さんよりお話をお願いをいたします。  （１）国・県等の関係機関の動向【資料３より説明】  ・求人、求職について現状を説明  【質問】  少しお聞きします。ハローワークさんと監督署さんの両方にお聞きしたいのですが、平成25年の５月、求人倍率がまだ1.1倍くらいのときに、現実に監督署さんがもっている資料として、その時点では残業という時間はどの程度だったのでしょうか。規定外残業というのは。いわゆる、定時時間８時間としますよね。20日間稼働で12か月とした場合に、どの程度残業があったのでしょう。  【回答】  それは、毎月勤労統計調査というものがあるのでそちらをもってこないとわからないのですけれども、だいたい年間で今150から60時間平均でパートも含めてです。  【意見】  結局、今、現時点は１倍を超えていますので、人が足りないという状態の場合の定時間外残業時間となっていますので、その辺が見極められていないと、人が少ないから残業するのか、人が潤沢にあっても残業しなくてはいけない状態であるのかということでもって、だいぶ判断が違うと思うのですよね。結局、仕事ができる人とできない人というのを一つなぎにするのは、これは仕方のないことだと思うのです。それを人づくりということでもって、人を育てていくという観点から考えていかなければいけないことでしょうけれど、人が余っているのに、かつ残業があるということの問題点をきちんと捉えていかないと。人づくりということがすごく重要だと思います。  【回答】  人が余っているのに時間外労働が増えているというそういった印象は持っておりません。先ほど花岡所長さんが話していただいた通り、求人がある程度多くなってきましたけれども、その正社員の割合、求人の割合というのは増えていないわけですよね。非正規は多くなってきています。ということは結果的に、中小企業というのは、取引先とか色々な会社によって臨時に仕事が入ってきたときに、どうしても正社員の方に負担がかかる。パートとかアルバイトの方は時間で決められて来ていますので、正社員の方に負担がかかる。つまりその結果として長時間労働になってしまう。その結果、疲れがたまるとか長時間労働が多くなってきている、そういうことだと思います。  【意見】  私どもは中小企業の応援団なものですから、お話させていただきますと、大企業さんも当然、非正規雇用もお使いだと思います。仕事の面でも、特に現在では単価の下降など問題がありまして、結局大企業さんが値上げをのまないという状態があって、そういう残業なり非正社員をとって頑張っていかなければならないという状況になっていること自体が大きな問題であって、必ずしもデータがすべてではなくて、根本的にものつくりという観点から踏まえた場合に、大中小とありますけれど、企業の根本的な見直しを、特に大企業さんがやっていただかないかぎりは、決して良くならないと私は思うのです。その辺りをおそらくすごく練っていかないと、特に岡谷は昔からものづくりのまちといわれていますので、すごく技術的なものが残っています。大手企業さんも、私どもも製造をやっていますが、岡谷の地にもっていけばすべてできあがるという信頼をいただいていますので、格差が生まれてしまうのは仕方がないのかもしれませんけれど。何てお話していいかな。  【回答】  言っていることはわかります。大企業の方に全く責任がなくて、中小企業の持続力がないからこうなっていると申し上げるつもりはありません。もちろん、大企業は大企業の中の産業構造の中で、ある程度改善していかなければいけない、中小企業はなかなかうまくいかない。その構造はあるとは思います。ただ、全国の中でも中小企業でも発展している会社がいくつかある。そういった会社が大企業とまったくつながりがなくて、自分の会社だけで独自にやっているから利益を増やしているわけではなくて、結局大企業とのつながりをもちつつ、自社としての独自性もある程度持ちながら発展しているという、そういう企業もたくさんあるのです。全国的にも、確かにものづくりとかそういう製造業で、少ない人材だったり、多く抱えているところもありますけれども、利益を生む会社の中には、労働時間、残業が少なかったり、やはりそういう会社というのは、色々な事例を見ると、働いている労働者の方からも色々な良いアイディアが出てくるという会社。やはりそういうのが大事ではないかと思います。大企業がこうだから中小企業にどうしても何かしわ寄せがきてしまっているというのは、それはわかりますけれども、今後もこのままでいいのか、やはりそこを私は考えてほしいと思っています。  【意見】  それはわかります。逃げの言葉かもしれませんけれど、結局そのしわ寄せというのが大企業にはないわけですから。大企業がしわ寄せをするのですから。そのしわ寄せを受けなければいけない状態という流れですよね。今の内閣がやっているその円安ということによって原材料があがっています。原材料があがることによってそれでコストがあがるのですよ。すみません、トヨタさん一社のお話で申し訳ないですが、トヨタさんは、毎年、値下げ交渉をやってきたと。今回だけはやらないことにしましょうという判断ですよね。そうなるとしわ寄せはどこに行くのでしょうか。で、岡谷市さんと、私の商工会議所の人が組んで、トヨタにアポイントメントとって、一生懸命話をさせていただいて、抗議をしていますけれど、そこにも一社が絡むのですよね、どうしても。直接トヨタさんとできないという構図なのです。ですから、個人的な話になってしまいますのでここで終わりにします。少々長くなっていけませんので、すみません、マイクをお返しいたします。  【質問】  すみません、２点、ハローワークさんに聞きたいのですが、２ページ、産業別の求人数の状況ということで表があるのですが、よくいわれるのが、求人と求職はミスマッチということですね、そういう言葉をよく聞かれるのですが、例えばこれ、求職での業種別というのは何かあるのでしょうか。そのミスマッチというのは実際あるのかどうかということを教えていただきたいのと、それと、今の他地域で、北信ですか、求人倍率1.19、特に長野が1.32ということで、どういうキャパでこういう高い倍率になっているのかというような要因がもしわかれば教えていただきたい。  【回答】  まず１点目、業種別ということですが、資料２ページのところに業種別の求人の状況というのを載せています。それに対して、求職者の業種別というのは、ほとんど統計として出てこないですね。というのは、例えば就職を希望するかたが、私は何々業で就職したいとはならないですね。例えば事務職を希望するかたは、建設業であれ製造であれ販売であれ事務職をしたいというかたちなものですから、その業種ごとの求職者の状況というのはほとんど統計として出てこないというのが実状です。２点目の地域別の状況なのですけども、今日本当はご用意できればよかったのですが、長野県全体のものを見ますと先ほどお話しましたように、長野のハローワークで1.32倍、最低が伊那の0.96倍ということで、かなり大きな差がある、開きがあるのですが、今手元に完全な資料がないものですから、少々感覚的な話になってしまいます。私は実は今年の３月までハローワーク長野のほうで勤務しておりましたので、その感覚でお話させていただきますと、ハローワーク長野管内で倍率が高いのは３次産業だと思います。販売、サービス関係がやはり圧倒的にこの全体量としてその第３次産業の伸びというのが求人倍率にそのまま反映してきていると思います。ですので、製造業が本当に活気を帯びてくると、南信地域、それからあとは東信地域ですね、東信地域南信地域というのは、製造業の景況にすごく大きな影響を受けます。ですので、ちなみに、東信地域も1.11倍ということで、長野県の平均値ですので、逆をいいますと今回の長野県全体が1.25というのは、北信地域が牽引している状況、特に長野ハローワーク管内のサービス業、販売業、いわゆる３次産業が、大きな要因だというふうに思っています。  （２）地方創生に関する意見交換  他にございますか。とりあえずここで今までの説明に対する質問ご意見については打ち切りをさせていただきまして、次に進めさせていただきたいと思います。次に、議事事項の２のほう、地方創生に関する意見交換を議題としたいというふうに思います。委員の皆さんには、地方創生地方創生と色々本当に毎日報道を賑わせたり色々な議論がございます。そういうところも含めながら、地方創生について、どのようなお考えをお持ちか、自由にご意見をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。  それでは、岡谷商工会議所の取り組んでいるお話をさせていただきます。先ほど長野県の開業率が全国で45位という話をしていまして、非常に残念だなという気がします。私ども商工会議所は起業に関しまして、創業支援に関しまして、最初から事業をしてまいりました。昨年より特定創業支援事業計画を提示しまして、認定を受けまして、現在では岡谷市、下諏訪町、今年になりまして茅野市も一緒に目指して色々の会議などを実行しております。コンセプトといたしまして、地方創生の時代に牽引する地域の経済社会のリードを目指す創業者を支援することを目標とした議論をやっております。地域を活性化させる技術リーダーの排出と、地域の実状を精通した講師を中心にカリキュラムの内容を構成して地域支援の必要、地域の状況に即した発展的継続的な企業の援護をするような支援を地域として展開しております。８月の29日から約８回の時間を使いまして、諏訪地域、地域創業スクールという事業をしまして、できるだけ多くの企業の皆様方をということをもって整備などを始めております。これは当然岡谷市さんと私ども一緒になって進めておりますので、皆様方のなかに、起業されたい方がいらっしゃいましたら、またご紹介いただければ、まだ締め切りはしておりませんので、よろしくお願いいたします。今現時点では国として特定創業支援事業をしておるのですが、それに則って、多くの利点がございますので、それを踏まえて進めていく予定でおりますので、ご理解をいただけたらと思いますので、よろしくお願いします。以上のようなことを今現在進めておりますので、私の話は終わらせていただきます。  少々思いつくままに喋りますので、系統だって話せないと思いますが、まず将来というか、小売業を営んでいる立場から感想というか話をさせていただきたいと思いますが、岡谷はやはり先ほどから出ているように圧倒的に製造業が多いわけで、小売業に携わっているかたが当然いるのですけれど、多くは中小規模の店がほとんどだと思います。そして、今後ますます効率化を求められていったり、あるいは利益をあげていくためには、なかなか正社員の採用というのは難しくなる一方かなというふうに思っています。例えばアピタさんですけれども、話を聞くとあそこに多い時100人以上のかたが勤めていて、正社員は数名で動かしているというような、そういうかたちでやっているのですけれども、本店の大規模の店舗とか、あるいはチェーン店というのも本当にローコストオペレーションで、正社員は本当に１人か２人というような、そういうかたちでやっているところが多くあります。私どもは、私も小売店をやっているのですけれども、我々業界も本当にいかに正社員を使わないで回せるかというのが１つのテーマくらいで、それをやっていかないとなかなか収益をあげていけないということで、どうしても非正規のかたに頼らざるを得ない状況なのです。どうしてもそういったかたがいて、若いかたもいるのですけども、やはりどうしても収入が少ない、あるいは安定的でないということから、結婚もできない、そしてイコール当然少子化にもなっていくという、負のスパイラルに入っていくみたいな、そういうところがあります。それで、他力本願的な感覚かもしれませんが、岡谷でやはり製造業が、皆さんがしっかり稼いでいただいて、そして勤めているかたたちの収入が増えていって、それが消費にまわってくる、その消費が我々小売店でも使っていただく、地元の店でも使っていただくという、その流れができてこないと、岡谷だけでみると、岡谷の小売業はやはり製造業頼みだなというふうに感じています。それと今度小売業云々ではなく私の感想なのですけれども、このまち・ひと・しごと創生の件なのですが、前回の説明の中にあったように、やはり東京とか首都圏に集中していると。やはり大企業の本社とかを、是非地方に分散するようなことが、もっと国とか何か、税制で優遇するとか、何かのかたちで、大企業が地方へ出ていく、あるいは霞が関の官庁も、出ていくということが、国全体の取り組みとしてもっともっとしっかり、もうドラスティックにやっていく必要があるのではないかなというふうに思っています。今はネットとか何とかで、その人が顔と顔をあわせてやっていかなければいけないということが少ないので、なくてもできるので、特に大企業みたいなところは地方にもっと出ていって、そして広い土地で、安い土地で、大勢の人を使って、地域のためにもなるような、そういう経営スタイル、そういったものができないのかなというふうに思います。特に信州は、山でありますけれども、広いところもありますし、土地も安いと思うので、あるいはＩターンというのですかね、そういった人気も非常に高いようなので、信州、長野県はそういうチャンスが大いにあるのではないないかなというふうに思います。そしてもう１つ最後に申し上げたいのは、人口増やそうとか企業ひっぱってこようということをやるのですけれども、岡谷だけでみるではなくて、下諏訪からとってこようとか松本とかでとってこようというのではなくて、やはり、少なくとも諏訪圏域でこのことに取り組むべきだと思っています。市町村合併はともかくとして、広域の諏訪圏域で、連携して企業を誘致するのか、岡谷とか下諏訪とかというのではなくて、この少なくとも圏域で誘致をしたり観光や商業が発達していくようなかたちがとるようなことができたほうがいいのではないかな。岡谷だけが増えて下諏訪減ったというのはあまり意味がないというふうに僕は感じています。すみません、まとまらないのですが、以上です。  観光協会の面から少し話させていただきます。岡谷市観光協会は４月から横河川の桜、出早のカタクリ、鶴峯のつつじ、小鳥バス、多くの市民の皆さんに春の花や、色々なイベントに楽しんでいただいております。今は、８月の13、14に行われます岡谷市市民祭、太鼓まつりのほうを協力させてやらせていただいております。今週末の12日ですか、太鼓保存会のかたたちと一緒に100名程度で飾りつけをさせていただいて、おまつり気分を盛り上げようということでやっております。今岡谷はシルクを中心にした観光ということで、昨年６月に姉妹都市でもあります冨岡製糸場が産業遺産に登録されたということで、岡谷の観光協会もシルクの専門委員会を立ち上げて行動させていただいております。やはり昔からの歴史ありますシルクを中心に、オンリーワンの観光を形成していきたいと思っています。そのなかで、今、主にやっておりますのは、やはり商業と工業と観光の融合をさせていかなければ、この地域はよくならない。やはり観光がよくなるということは最終的には、このまちに住みたいと、このまちにまた行ってみたいなという観光客を増やす、定住してもらう人を増やすということですので、それを中心に考えております。そう考えますと、今回のこのまち・ひと・しごと創生会議でございますが、この皆さんとこれから話をしていく内容と私たちの観光協会で今やっている内容はまるきりオーバーラップしてほとんど同じようなものでございますので、このなかでどういうふうにまとめていったらいいかということで考えております。今は現状分析でございますけれど、これからは仕事、結婚・子育て、人の流れなど、よく考えながら、何とか少子化の歯止めをしていきたい、その方策を考えていきたいなと思っております。まとまりませんが、意見とさせていただきます。以上でございます。  私も少しどのような話をしていいのかわからないのですけれども、今回この会議のほうに一企業の立場ではありますけれども、１つに女性ということもございますので、今日は、少し女性という観点でお話をさせていただければなというふうに思っております。それを含めまして、今ここのなかにあります結婚、子育て、育児ですね、そのお話がありますので、それを含めて、当社の今の実態も含めて少しお話をさせていただければというふうに思っております。皆さまご存知のように、ＪＲの前身であります国鉄時代がありまして、ＪＲに変わりましてから、当社は社員構成に大変大きな特徴がございまして、フタコブラクダといわれております。もう50代後半の社員がほとんどでございます。それで、ＪＲに移行する段階で、雇用を一時ストップしておりましたので、その関係で私40代ではあるのですけれども、今１番リーダーとなりえるような中心になる40代が当社の場合大変少なくなっております。そのような関係で、その間を埋めようと、社会人採用であったり、そういった雇用体制をとってはいますし、毎年新入社員も年間で約1,200名くらい新規採用ということで採用させていただいているのですが、それでも大量退職に追いついていかないような状況で、大変今、社員数が維持していくというのが厳しい状況ではあります。なので、そのようななかで、せっかく当社に入って頑張ってきた女性社員が、例えば結婚や育児、そういうことを理由に会社をやめず、また、一旦休職はしましても、また戻って、さらにその力を発揮してもらいたいということから、10年以上前から、そういったかたちでスタートして参りました。実際にここ数年は、女性社員も、全体に占める社員数の割合を30％以上は確保しようということで、採用を進めております。また、育児に対する支援も、今は子どもが３歳に達するまでは育児休暇を取得するということがありますし、あとは小学校３年生までは勤務時間を時間短縮できるというような、要は制度面といいますか、そういうところはだいぶ改革をしてきているかと思います。ただやはり１番は、やはりそういう制度が、しっかりとその職場で、本人が安心してとれるかということと、あとは職場が全体としてその育児休職をしている社員そして職場に復帰した社員に対してしっかりフォローができるかというところがすごく大事になってくるかということで、今、私たちも、本人の意識ももちろんモチベーション上げる、やる気を上げるように色々な本人の成長のフォローもするのですが、それをバックアップする管理者といいますか、職場のほうも、しっかりと教育をして、しっかり休める、安心して休める体制、そして戻ってきたときにはしっかりとまた頑張ってもらえるような体制がとれるようなそういった環境面も、バックアップを色々なところでしていっています。そのようなこともありまして、今結構、20代の駅の社員もそれから車掌、運転手も女性が増えてきておりますが、そういったなかでしっかり、結婚・子育て等しまして、また職場に復帰しているというような流れができつつあります。実際まだ本当にそういったようになってきたのは最近のことでございまして、私が入社したころはまだ女性が本当少なくて、どちらかというと結婚したら辞めていった先輩たちもやはりいたような時代でございましたが、会社としてもやはり女性の活躍ということに対してすごく力を入れてやっております。会社の話ばかりで申し訳ないのですが、やはりそうやって女性が子育てをしていつでもまた社会復帰を安心してできるような環境をそれぞれの企業さん、それから市として、地方としてもしっかりできるようなことが、そういう体制ということがやはり１番いいのでないかな。本人ももちろんそうですけれども、やはり周りの環境というものもすごく大事になってくるのでお互いにそういう意識を共有することが、一方だけそうなっていてもだめだと思いますので、やはり結婚・出産・育児を通してお互いに盛り上げるといいますかね、商売であったり企業であったり色々な面をそういう頑張ってやっていこうというお互いの意思疎通をしっかりはかっていくことが大事なのではないかなというふうに思っております。自分の、当社の話がほとんどになってしまって申し訳ないのですけれども、そのように考えています。  信州大学の岡谷といいますか諏訪全域の取り組みについて説明させていただきます。岡谷市には、ララオカヤとテクノプラザ岡谷に、信州大学のサテライトオフィスとサテライトキャンパスを作っていただいています。本当にありがとうございます。それでですね、初めに個人的な意見からなのですけれども、大体私は朝の７時くらいから昨日は夜の日付が変わって１時くらいまで仕事をしていまして、先程話を聞いているとかなりの残業ではないかなと思ったのですけれども、それになるのは少し話が変わりますが、社会人のための大学院の講義をテクノプラザ岡谷で行っていまして、夜の６時から９時までやっていますので、９時過ぎに終わってＪＲに乗って電車に乗って帰ってきますと12時過ぎに長野につきますので、大体その周期でやるとかなりこのような時間になってしまいます。何故、信州大学がこの岡谷の地にサテライトキャンパスを置いたかということについて少し背景だけ説明させていただきます。平成20年なので少し前なのですが、博士課程を設置する時に６市町村の企業にアンケートをとりました。ここではどういういうアンケートをとったかといいますと、博士課程修了者は何名いますか、修士課程修了者は何名いますか、大卒者は何名いますか、ということを聞きました。ほとんどの企業のかたがた、これは64社にアンケートを送ったのですが、40社の回答ということです。40社のほとんどが大卒者がいますという回答があったのですが、人数の割合をみますと大卒者は約10％、八十数％がその他ということです。すみません、きちんと説明しましょう。修士修了者はそのうち0.6％。博士修了者は0.1％ですので、その他といいますと80％以上はですね、それがその他ですので、高卒または高専卒ということになります。ということで、大学卒の従業員をまだ確保できていないということです。ですから、技術系社員の質、量ともに確保できているかというところでいいますと、数はＯＫなのですけれども、質がＮＧという回答がほとんどです。ということで、信州大学としては、このままではいけない、人材育成をしていこうということでこの地に次のようなコースを作っています。４段構えでつくっていまして、１つ目は修士課程に入るための準備コースというものを作っています。諏訪圏ものづくり推進機構と一緒になって、大学院に入る前の基礎勉強をしましょうというコースです。その次に修士課程、そして博士課程とここまで３段階なのですが、もう１つが卒業、修了した後のネットワークをつくって、研究会を立ち上げて、ものづくりをそのまま進めていきましょうということを考えています。ここに人が集まってきたり、魅力のあるような土地にしようということを考えるときに、私たちはどのようなことができるかといいますと、やはり提案型の技術者をつくっていきたいと思っています。先ほどもコメントがありましたが、いいアイディアが出てくるような環境が必要ではないかと。アイディアを出してそれを具現化できるような、そのような体制づくりが必要ではないかなというふうに思います。釈迦に説法かもしれませんが、この諏訪地域の企業の方々は謙虚な方々が多くて、仕事が来るのを待っているという方々がほとんどですね。提案型、こういうものができますよということがなかなかできないようです。具体的な例をいいますと、卒業生の中で太陽工業の○○さんというかたがいます。このかたはどんどん提案していきました。新しいプレス機を開発したり、色々なことに挑戦していきましたら、学会で賞をとったり、色々な講演会で呼ばれて、発表するようになりました。残念ながら岡谷市ではないので、本当に残念なのですけれども、是非そういう企業がこの岡谷市から出てきてほしいなというふうに思います。もう１つ、別の企業でいえば、高卒・高専卒の方々は来てくれるのですが、大卒はいないということですので、そういう勉強に対して援助しますよという企業がありました。それは高専・高卒の方が私たちの大学院に入学するということです。大学出なくても大学院に入れるのかというふうに思われる方がいますけれど、実はきちんと審査をして、大卒と同程度の技術をもっているというのであれば、大学院に入学可能です。ですから、この制度を利用していただいて、是非大学院に入っていただければなというふうに思います。また、ＯＢ、つまり卒業生たちでつくった研究会があるのですが、このメンバーで、実は信州大学の人工衛星をつくりました。人工衛星をつくって打ち上げまして、その時に非常に活気があったので今回はその技術を使いましてロケットをつくって打ち上げようというふうに思っております。このように、自ら考えてものづくりができるようなネットワークづくりをしていきまして、この地域を発展していきたいと思っています。最後になりますけれども、この取り組みがどこまで浸透しているかわからないのですけれども、残念ながら今年の準備コースといいますか、大学院に入る前の準備のコースですけれども、ここに志願してくれるかたがゼロなのですね。このままですと大学院をここに置けなくなってしまう。人がいないのに教員が在中、常駐するということは難しいので、大学としての立場から考えますともう少しＰＲしていただけたらなというふうに思っています。大学からもＰＲしていきますけれども岡谷市、また色々なところでＰＲしていただければ幸いです。長くなりましたが、以上で終わります。  これからの話、バックデータがあって、何かに基づいてということではなく、全く個人的な、考えていること、感想みたいなことになって大変申し訳ないのですけれども、いくつか述べさせていただきたいと思います。  私が働いているのが工業高校ということで、このなかでいえば「ひと」の部分に関係する所かなというふうに思っております。岡谷地区では、「ものづくり」に携わる人材、これが求められているところだというふうに思うのですけれども、工業高校で高校生たちを見ていると、「ものづくり」についての興味、関心が高い生徒は、高校生活を十分に充実させていける、そんな様子が見られます。自分の昔の経験も踏まえてこのことを考えると、やはり、小さいとき、子どものときから、物に触ったり、壊したり、あるいは作ったり、そういう体験がとても大事ではないかなと感じております。岡谷市では、保育園生も市内色々なところをまわって、例えば、うちの高校にも保育園の皆さんにたくさん来ていただいて、触っていただいたりしているのですけれども、これらの取り組み等を充実してもらって、保育園・小学校・中学校というようなところで、ものを壊したり、作ったりという、ものに触れる機会がもっとあればいいのではないかなと考えております。そのような機会に、例えば高校生が出向いて一緒に色々やってみるというのも、高校生にとって、大変良い体験になるかな、ということを感じております。  あと、高校生そのものについていえば、先ほどもありましたけれども、高校を卒業しても学び続ける、そういう意欲、気持ちというものを育成していく必要があると思います。ただ、これは結構難しい部分もありまして、様々なところからご意見をいただければと思います。  もう１つ、工業高校という立場からいうと、実際に社会に出て仕事をするときのモチベーションや能力を高めるため、実際の企業の方のお世話になり、そこで体験させていただく「インターンシップ」を３日間ほどお願いしているわけですけれども、それをさらに進めて、「デュアルシステム」を導入できたらと考えています。デュアルシステムというのは、以前勤務した学校も含め、いくつかの学校でおこなわれていますが、年間20日～30日くらい企業にお世話になり、その日は朝から晩まで一緒に仕事させていただくというようなシステムで、企業の方には大変な負担をかけてしまうわけですけども、生徒がより前向きになるという経験があります。  また高校は、本校のような工業高校のほかに、普通科の高校がたくさんあるのですが、先日の資料にもあったように、卒業したあと都市部に出ていってしまい、戻ってこないというようなことも話題になります。民間の奨学金で、長野県内に戻ってくることを条件に奨学金を出しますよというようなもの等もあります。応募者が果たしてどの程度いるかよくわからないですが、例えば、諏訪地区に戻ってくることを条件に大学等外で学んでくるものに奨学金を用意する、などというのも考えております。  あと、「ひと」から少し離れますが、「まち」ということからいうと、諏訪というのは、農業地域とか工業地域とか色々な地域がある程度コンパクトにまとまっている地域かなというふうに思います。それを活用して、例えば、自転車があれば、域内を移動できるというような、安全で暮らしやすい「まち」（コンパクトシティ）をつくっていければ、移住を促すときの１つの売りにもなるのではないかなというふうにも思ったりしております。そのような意味で、先ほどもご意見ありましたけれども、岡谷だけで考えるわけでなくて、やはり諏訪地区全体で連携して考えていく、そういう考え方も非常に有効でないかということを感じております。以上が私の考えです。  今日この市議会の場を外れたところで、皆さんとは少し違うごく一般の主婦と立場というか、そのようなところから、まとまりませんが、ご意見というか話をさせていただきます。今回のテーマにもあります、特に岡谷市が、岡谷市だけではないですけれども、人口減、それから少子化が進んでいるというようなことのなかで、結婚とか子育てとかそういうことをテーマに話をしようかなと思って今日まいりましたが、今日の資料１のなかで、若い世代の結婚云々というようなことが出ておりまして、大変参考になりました。それで人口保存対策とか少子化の問題でまずあがることは、第１は結婚、出産、子育て、そこにいくわけですけれども、その１番最初の結婚というところで、私自身これに関しては非常に皆様にお話しできる立場ではないという立場であります。というのは、私は子ども、娘が２人おりますが、１人は結婚しましたけれども、もう１人うちにいるものもおります。考えてみましたら、私の身内のなかで結婚しない子が親戚関係の中で６人おります。これはもう本当に皆さんに申し訳ない話でして、近所みまわしても、なかなか特に男性のほうが多いのですけれど、結婚しないでうちにいらっしゃるという家庭が多いですね。夫婦２人プラス息子さんとか、当然娘の人もいるのですけれども、何故かなと思って、ずっと思っていたのです。自分も人のことはいえないのですけれども。そうしたら、今日これをみたら、やはり結婚願望はあるけれども結婚できないという人たちが大勢いるということで、やはり結婚というのは人間は心をもっているというかそういうことがあるので、何でもくっつければいいという問題ではない。そこに１つの問題があるのかなと思います。ずっと色々な条件はあると思うのですけれども、先ほどからお話になっているように、働く場所がどうのこうとか、お金がどうのこうのとか、環境とか、住みやすい場所とかそういうようなことが確かにあるのですけれども、やはり１人ひとりが結婚をしようというその思いになかなかならない、なれない、そういう環境をどうしたら逆にしていこうかというところが、大変重要なことで、なおかつ１番難しいことなのかなと思うのです。これは行政任せとかそういうことではなくて、親の躾が私の場合は悪かったのかなと思いますけれども、やはり結婚して赤ちゃんができて１つの家庭を持ちその子供を育てていくというプロセスがとても大事なことではあるのですけれども、そこにいきつけない人たちがやはり人口減にもつながるし、もちろん少子化にもつながるわけでして、ではこれをどうすればいいのかなと思うのですけれども、これが私は１番難しい問題、仕事を与えればいいとか、与えるものではないというところが１番難しい問題だろうと思っています。私もいい提案があるわけではないのですけれども、ただ後は第５回で、今度の第５回が８月、今日いただいたなかにみましたら、スケジュールのなかに結婚・妊娠・出産・子育て教育とかそれに関する意見交換などがまたがありますので、そのなかで具体的な部分、私の話をしたい具体的な部分はそのときにまたお話ができればいいかなと思うのですけれども、１つご紹介しておきたいのは、社会福祉協議会の中で結婚相談というのをもう何年も前からやっていらして、それに携わっている人が私の友達でいるのですけれども、男性は40歳で一応結婚して別れたという立場の人、女性24、5歳で子どもさんが１人いるという、そういう、それは登録制なのでそこに登録しなければいけないですけれども、そんなかたがたまたまうまくいくかもというか、話がうまくいって、まだ結婚まではいかないのですけれども、そういうようなことで、何かきっかけがなくて今まで結婚できなかったかなという思いがするのですね。それである程度年をとってしまうと、それこそきっかけを逃してしまうとなかなか周りからも話ももってきてくれないしいいや自分で何とか生活できるからということで暮らしていく人たちも多いというなかで今日そういう話がありましたので、最後まで諦めてはいけないと、まだチャンスがあるからともちろん娘にもそういいたいと思うのですけれども、なかなかどうなるかわかりませんが、そういうことでやはり幸せな結婚をして、時には別れてシングルマザーとかシングルファーザーとかいらっしゃるのですけれども、せっかく人間に生まれてきた以上、やはり結婚して家庭をもつという、家族をもつことの大切さのようなものを、何かの機会で訴えていく話がしていけたらいいなと思っています。そのようなことで社協のこともお話したのですけれども、そういう事業をしているということもありますので、是非登録をしてもらうように今日頼んできてといわれました。それと、岡谷市でも市民の有志のかたがこの４月からそういう結婚相談的なものを立ち上げましたので、そういうようなことをして、昔の世話焼きおばさんていう人は今はいなくなってしまったので、何かそういうことを地域のなかで、皆でそういう結婚に結びつくような環境づくり、色々なものがあると思うのですよね。先ほどもおっしゃっていますように、色々なことがあり、その条件が今かなりクリアできていると私もお話を聞いてわかりましたので、あとは気持ちといいますか、これがまた１番難しいと思うのですけれども。そのようなことで、結婚し、子どもができ、家庭をもつという、そのプロセスを何とかしてこれからの若い人たち、若い人たちばかりでなく結婚しないでいる人たちにも、お話してあげられたらいいのではないかなという思いでいます。あと細かいところで次の５回のときにまたお話したいと思いますけれども。何かまとまりませんけれども、色々な問題を抱えている人もいますし、本当に結婚したくても結婚できないというかたたちもいるということを私たちは頭に入れておかなくてはいけないのかなと思いはしました。  私はこういうふうに思っているということを述べてみたいと思います。結婚・出産・子育て、若者が子育てに負担がかからないような手立てが必要だというふうに思いますし、新しい人の流れということは、働く、それから育てる、共に支え合い、楽しい暮らしができる、そのようなことをイメージしながら、岡谷市は製糸業を始めとして、精密工業が発展をしてきたまちでありますし、そういったものづくりに対する意欲といいますか、改善といいますか、そういうものをもった人たちの集まりだなというふうに私は感じているわけでございます。まずものづくりから、今いった子育てとか、楽しい人の流れだとか新しい人の流れだとかというのは、やはり経済的な基盤がきちんとしないと、そういうことがどうしてもお題目になってしまうというふうに感じられています。基幹産業であるそういったものをきちんとスピードをあげてやっていく必要があるではないかと、先ほど信大の先生もいわれたように、ララオカヤとかテクノプラザとかというところを大いに利用して、今、ナノテクノロジーといいますか、そういうものだとか宇宙開発にむけたものづくりだとかそういったものが着々と進んできているように私は思っているわけなので、この間も東亜工業といったか、ＬＥＤのそういう会社が下諏訪のほうにくるというようなことも聞いておるわけですけれども、そういった基幹産業をベースにして、岡谷の力、もっているものを引っ張り出してやれるようなかたちを官民、そういうものが一緒になって作り出す方法というものを急いでやっていく必要があるのでないかというふう思います。難しいことはよくいえませんけれども、第４次の総合計画のなかにも色々な部分で重要なものがうたわれていると思うのですけれども、その中でまち・ひと・しごと創生の区分をできるだけピックアップしてアピールして、力を入れて、産業振興に力を入れて誘致する、また私はここの技術とか持っている力というのは、世界にアピールできるまた各国からもそういう関心となるようなそういう仕事をしていると思うのですけれども、それがもっている力がまだ引き出せていないような、そういう感じがするので、そういうところをやはり諏訪とか岡谷というのではなくて岡谷からそういうものを発信し、また意欲的に外に出て仕事をもってくるといいますか、そういった、おれのところはこういったことができるんだよというようなものを持ち込むような、またそれを発信して他からも受注がとれるような、そんなことを、夢見ながら完成させていければ、結婚もまちづくりも、人の流れも自然とできてくるのではないかというふうに思っております。皆さんよろしくお願いします。以上です。  ものづくりを中心とした産業振興等については色々なここにもいらっしゃる方々も大勢いらっしゃいますし、日ごろから色々なかたちで取り組んでいらっしゃる、しかも具体的に色々な努力をなさっているということでございますので、私は、市民という立場から、これから岡谷市、まち・ひと・しごと創生総合戦略を策定していくにあたってという部分で、少し申し上げたいと思います。２点ございます。１つはですね、この総合戦略を策定していくというとき、前回のお話にもございましたけれども、岡谷市人口ビジョンというものが１つ、非常に中心的な、目標になるのかあまり僕はわかりませんけれども、１つの指標というか、ものを考えるときの基準になるのではないかというふうなお話しだったと思います。ですのでそのことについてなのですけれども、これは先日岡谷市の人口ということで色々な資料をいただきましたけれども、私自身としては是非、もちろん人口が多いに越したことはないのですけれども、多いほうが良いということだとは思っていますけれども、無理のない人口ビジョンの目標というものを是非つくるべきだなと思っています。と申しますのは、この間ご説明いただいた資料にですね、いよいよ岡谷市がですね、自然動態による減少、亡くなる方のほうが生まれてくる人たちよりも多いという状態のなかで、減ってきているという状態に入っている。社会動態ももちろんありますけれど、大きな要因は完全に自然減だということだと思います。先日７月の頭に、今年の１月１日時点の住民基本台帳、国の人口調査の結果がでました。そこではもちろん岡谷市まではわかりませんでしたけれども、国と長野県ということでいっても、もう全体として自然減の要因によるものが圧倒的という結果が出ています。そうなってくると、全国的にも岡谷市ももちろんですけれども、長野県もどこの市町村も基本的に全体としてそういうかたちでも減っている時代に入っているということだと思います。ですので、これを維持をしたり増やしたりということは現実的に極めて難しい。国を挙げて移民政策でもしない限りはですね、これを急激に増やしていくというのは基本極めて難しいということだと思います。それで仮に色々なかたちの少子化対策が功を奏して出生率が上がったとしても、多分その効果として人口が維持できるとか増加に転じるというようなことが仮に起こったとしても、おそらく、今生まれた、たくさんここで今年生まれた、それでその人たちが次の子ども産むということになってくると、少なくても30年とか50年とか、そういうスパンの流れにならなければ、今増えたとしても、そこまではいかないということだと思います。その間何もしなくていいかというわけではもちろんないということだと思っていますので、やはりその現実を踏まえたうえで、もう１つ人口を維持していく観点とは別に、人口が減ることがイコールまちの不幸にはならないのだという、むしろ人口が減っても、豊かになる方法はあるのではないかというような観点でのこれからの創生総合戦略策定という観点、どこかで是非入れていけたらいいなというふうに個人的には思っています。では具体的にどのようなことがあるのか、正直まだわかりませんけれども、とにかく人口減イコールすべてがマイナスということにはしない、させないそういう観点が必要だなというふうに思っています。と申しますのは、こういう状況のなかで、人口を増やすということ、あるいは移住をするということになると、当然皆さんからお話があったように何らかのかたちで、どこからか移り住んでいただかなければいけない、これは日本全国人口が増えないというより、減っていくなかでどこのまちもどこの地域もすべて同じことを考えている、同じようにしたいというふうに望んでいるということですから、１つ間違えると小売店が安売り競争をして体力を消耗していってしまうというようなことにもなりかねないというふうに思いますので、是非人口ビジョンについては冷静に事実を踏まえたうえでの策定、指標つくりということが必要ではないかと思っております。それからもう１点は、このかたちのなかでパブリックコメントの使い方というものを是非こういうふうに工夫ができたらなというふうに個人的には思っています。というのは、この場も非常に色々な各界の経験、知識アイディアをお持ちの皆様が集まっていらっしゃるということですが、当然のことながら前回の話の中で１番のこれから総合戦略を作っていくうえでの１つの対象になる層というのが、女性でありそれから若者であるというところに当然なっていくであろうと思います。その点に関して申し上げますと、是非若い人たちの考え方、意見あるいは今の岡谷市に対する見方とらえ方、あるいは女性の皆さんの今このまちに対するあるいはこれから先の岡谷市に対するものの見方とらえ方そういったものを、できるだけやはり反映させていくこと、観点が必要ではないかな、プロセスが必要ではないかなというふうに思っています。先日、おっしゃっていた、太陽工業の○○さんのお話がでましたが、それはもちろん企画をされて、新聞にも出ていましたが、諏訪高で高校生のプレゼンテーション大会というものがございました。そこでやはり内容が詳しくはわからなかったのですが、新聞報道だけでしたので、色々なやはり地域に対するまちに対する非常に建設的な具体的なアイディアというようなものを高校生の皆さんが発表する機会があったというような話を聞いております。それから、１日２日前だったと思いますが、岡谷市の中学校で、岡谷市の将来を皆さんどうしたらいいかと思うかというようなまちづくりに対する考え方というものを、勉強したうえで発表していただくと、何かそういう機会をつくったというような記事もございました。ですので、是非その機会を与えて、ただアンケートとかそういうことではなくて、何らかのかたちで岡谷市内の各学校の高校生だとか、是非皆さん、本当の真剣な気持ちを是非発表したり聞かせてほしいというような機会、あるいは、もっともっと大勢の子育てをしている、あるいは子育てを終えられたあるいはこれから子育てをしたいというふうに思う女性の皆さんが、積極的に遠慮なく意見が述べられるような、そのような機会を是非つくっていくことが、このテーマにとっては非常に必要ではないかなというふうに思っていますので、それについては是非前回のイメージ案のなかでのパブリックコメントの部分がございましたので、そこに関しては一般の人たちに広くきていただくというようなパブリックコメントだけではなくて、そういった焦点、対象のかたをある程度絞った、そのようなかたちでのパブリックコメントがございましたので、そこに関しては一般の人たちに広くきていただくというようなパブリックコメントだけではなくて、そういった焦点、対象のかたをある程度絞った、そのようなかたちでのパブリックコメントができればいいのではないかなというふうに思っておりますので、よろしくお願いいたします。以上でございます。    まず私がこの前の会議に参加して思ったことなのですが、20代とか30代のかたが少ないというか、いないのだなと思って、もっと若い人たちの意見も聞いて、その意見の反映をしていけばいいなと思ったのですけれども、それから、少子化について思ったことは、自分たちが少子化の原因をつくっているのかなと思いました。自分もそうですけれど、今ここにいる方々のお子さんが結婚して子どもを産めるように自分たちがこれからそうやって子育てを頑張らなければいけないのかなと思いました。子どもはいるけれど東京へ行ったりとか他県へ行っているとか、そういう問題もあってなかなか難しいとは思いますが。この前、テレビで小泉進次郎さんがいっていたのですが、第３子支援よりも第１子支援がまず大事だと私も思いました。今の時代はネットも普及して家族と同居していたりとか、生活もそのほうが楽だし、働いていて給料も自分で自由に使えるとかそういうこともあって、わざわざ結婚しなくても、面倒くさいとか思っている人も多いのではないでしょうか。その人たちを結婚相手をまず見つけて、結婚して子どもまで産むというのはすごくハードルが高いのではないかなと思って、第３子の支援よりも第１子の一歩踏み出すことのできるように金銭的にも援助したりとか、そういう一歩踏み出すような勇気が出るような支援をしてもらうと、結婚して子どもも生みやすいのではないかなと思いました。あまり上手に説明できないのですけれど。第３子の支援よりも第１子の支援が私は大事だと思いました。それからもう１つ、これから結婚したい人とか、どうやって結婚相手を見つければよいかという資料１にもあったのですけれども、相手と巡り会わないとか、そういうものを街コンとかよく聞くのですけれどもそういうこともいいと思いますし、異性とうまくつきあえない人、生活保護とか金銭的な面など、トータルで話ができるようなケースワーカーなどがいればいいのではないかなと思いました。私も結婚してすぐに曾祖母の介護もすることになったのですけれども、介護も24時間だし、それで子どもを産んで24時間、子どももみて介護もしてというと、少し難しいなと思って、子どもをつくるのを少し諦めていた部分もあったのですけれど、そういうケースワーカーなどがあれば、わざわざ市役所までいくのではなくて、市役所の人が何時にうちにきてくれるとか、うちにきて相談をしてくれると、家族以外の意見だとか、もっといい意見とかが聞けると思うので、そういう意見を聞いて参考にして子育てができる、子育ての不安などもなくなっていけばいいのではないかなと思いました。うまく説明できませんでしたが、以上です。  報道の立場からということはなかなかないので、個人的に今皆さんお話したことも含めて私の見解、これがいい悪いは別として少し話をさせていただきます。まち・ひと・しごと創生で国からきていることというのは、人口を減らさない、そのためにどうするか、それをそれぞれの地域で考えてくれという部分でいうと、人をいかに寄せるかというかたちで考えると、取り合いの状況になって、日本全体として結果いい方向にはいかない、ということになってくるとどうなるかというと、やはり、先ほどの話ではないですけれども、結婚していない人が増えている、それをいかに結婚する方向にもっていくか、またさらには子どもがやはり生まれていかないと人口増という方向には流れない。特に子どもが実質として２人を目指して、うちも１人なので大きな声でいえないですけれども、２人を目指していくような状況をつくらなければいけないというようなことがあると思います。ただ色々な要素でそれができていないというのが現実、だからこういう状況に陥っているという部分のなかで、ではどうしていけばいいかというなかで、私の見解というか色々なところで聞いてきた話だと、最近の話ではないですけれど、よく退職後は田舎暮らしというかたちを狙って都心から今田舎暮らしで人を寄せている、長野県は結構田舎暮らしに適している地域も多いので、それぞれが結構動いていると。伊那地域は結構その辺りが強く動かれているような話も聞いているのですが、そういったなかで最近の動きとして定年退職後以外に30代40代の若い人たちも田舎暮らしを希望している人が増えてきたと。そういう人たちは30代40代でこれからも働かなくてはいけないので、働く場も必要であると。田舎暮らしはしたいのだけれども行った先で働ける場がなくてはいけない。それでもう１つ、生活をしていくにも、定年退職してくるという場合はある程度退職金なりお金もあるので自分の家も建てられるかもしれないですけれども、30代40代のかたにとってはなかなか手に入れることが難しいというなかで、できるだけ低価格で子育ても含めてある程度の広さの家が提供できる状況がないといけない。そういった部分が重なってこないとなかなかきたくてもこられないというような実状が今あるというような話を聞いたりしているのですが、そういった部分で、ではどれが先に立つかというなかで、田舎暮らしを求めている人とはある程度都会の忙しい暮らしに疲れていて、一概にそうではないかもしれませんけれども、そういう部分でもう少しゆっくりとした部分、生活を味わいたいというので田舎暮らしというものを求めているのかもしれないというところで、先ほどの田舎にきたとき、働くだけで、まったく日々の休みもなければ生活もないでは、何しにきたのというようなかたちにもなると思いますし、このあたりの地域、特に田舎暮らしを提供できるエリアでもあるという部分では、やはり企業である程度余裕、ワーク・ライフ・バランスではないですけれども、余裕を持ってできるような企業体質を目指していく部分があるといいのではないかなというところは今のお話を聞いていて感じました。もう１つ、先ほど、いかに結婚できるか、子どもを出産してもらうかという部分のなかで、やはりそのあとに不安がないような環境づくりが重要かなと。やはり子育てといった面で安心できる地域、その辺がしっかりできていると、いいかたちがみえてくるのではないかなと。もう１つは、どうしても都会へ出ていってしまうと戻ってこない、つまりＵターンが望めないということが１つ減っていく要素でもあるなかで、Ｉターンを求めるよりも、Ｕターンを求める、Ｕターンしたくなる、自分たちの育ってきた地域に帰ってきたいと思う地域をつくるということのほうがＩターンで他のところで生きてきた人をこんないいところですからきてくださいというよりも、戻りたいと思うような生活環境ではないですけれどもそういったところが用意できていくと、おのずとＵターンしてくるのではないか、それはやはり自分が生きてきたところで戻って生活してきたところに何か恩返しをしたいというところだけではないかもしれないけれどもそういった気持ちがあるとやはり戻ってくるのではないかなというところもあるのでそういったところをいかにつくりあげられるのか、若い人たちにとって地元愛をいかにつけられるかというところも１つの課題ではないかなと感じております。すみません、まとまらないですけれども、私のほうからは以上です。  ありがとうございました。ここで金融というところなのですが、時間がきておりますのでこの金融の皆さまには次回にご意見をいただきたいと思います。たっぷり時間をとりますので、ご用意をしていただいてよろしくお願いいたします。一応今日はこのフリーの意見をいただくという機会は一旦ここで閉じさせていただきたいと思いますのでよろしくお願いをしたいと思います。その他ということで連絡がありますのでよろしくお願いいたします。  （３）その他【資料４より説明】  ・まち・ひと・しごと創生有識者会議の今後のスケジュールについて説明  ただいまスケジュール等の報告をさせていただきました。また配らなければならないものにつきましてはお配りさせていただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。それでは本日の会議事項はこちらで終わります。  （４　閉会）  それでは、以上をもちまして、第２回岡谷市まち・ひと・しごと創生有識者会議を終了いたします。ありがとうございました。 |

上記に相違ないことを確認する。

会長　　今井　竜五